

ダニエル・イノウエの生涯

—日系アメリカ人最初の上院議員の光と影—

The Life of Daniel Ken Inoue

—The Light and Shadow of The First Senator of Japanese American—

山本 茂美[†]

Yamamoto Shigemi

Abstract The famous Japanese American, Daniel Ken Inoue died in December, 2012. He lost his arm during World War II. He fought for the United State of America. He volunteered to enter 442 troop –united by only Japanese Americans. He fought because he wanted to protect their honor –the honor as the Japanese American. He wanted to be admitted that Japanese American as same as white Americans, because he lost his right arm, he lost his dream to become a doctor. So he became a lawyer. But when he was the student, he was interested in politics. He became the first senator from Japanese American with difficulty.

President Obama told he became the politician after he knew Daniel Inoue. He belonged to minority as black American, but he could make his dream come true. Since Japanese had immigrated to the United States of America, they had had many difficulties, but they tried to solve their problems patiently.

This time I studied the life of Daniel Inoue, and I could learn about of the real life of Japanese American in Hawaii.

As President Obama said, he is the hope of mainolities.

はじめに

昨年 12 月 17 日ダニエル・イノウエ氏が亡くなった。日系アメリカ人の研究をする上で必ず語られてきたのが彼の功績である。彼が亡くなった後、オバマ大統領は葬儀に際し弔辞の中で彼の功績をたたえた。このことについて次のように述べられている。

「米上院歳出委員長で、民主党の重鎮、ダニエル・イノウエ上院議員（ハワイ州選出）が 17 日、88 歳で逝去した。1924 年、福岡県からハワイに移住した日本人の両親の間に生まれた日系 2 世で、第 2 次大戦中、日系人部隊に参加し、その功績は、偏見を受けていた日系人の存在を米国内で高めた。1959 年に下院議員に当選以後、上院に転じ 50 年間議員を続けた。

葬儀には、オバマ大統領、クリントン元大統領が参列し、弔辞を述べたが、オバマ大統領はその 11 歳の少年時代にイノウエ議員の演説に衝撃的な感動を受けたことが、政治家を志すようになった理由だとの回想を披露した。」以下がオバマ大統領の弔辞の一部である。

『白人の母親と、黒人の父親の間に生まれ、インドネシアとハワイで育った私は、そのころ、この世の中にどう合わせて行くかは見かけほど簡単ではないと、考え始める年頃だった。そんな時にこの人が現れた。並外れた戦功を引っ提げて、社会の片隅から力強くの上がってきたこの人は、いわゆる上院議員のイメージからはまったくかけ離れていた。しかしこの人が（日系人というハンディを乗り越えて）全米の人々から尊敬を集める様を見て、私が人生で何ができるかということを見せてもらった気がしたものだ』

[†] 愛知工業大学 基礎教育センター非常勤講師

(Now, here I was, a young boy with a white mom, a black father, raised in Indonesia and Hawaii. And I was beginning to sense how fitting into the world might not be as simple as it might seem. And so to see this man, this senator, this powerful, accomplished person who wasn't out of central casting when it came to what you'd think a senator might look like at the time, and the way he commanded the respect of an entire nation I think it hinted to me what might be possible in my own life.)

この記事の中で次のようにオバマ詩の心情を述べている。

「オバマ少年の心を打ったのは、太平洋戦争中敵性国民として、強制収容所に収監されるという国家の裏切りであった日系人の一人であったにも拘わらず、米国の民主主義の理念を信じて、欧州戦線に従軍し、片腕を失いながら大きな勲功を立てた一人の人間の姿であった。

オバマ大統領はその時の感動を、『言葉にはできなかったが、心に希望の光が強く差し込んできたのだ』と心を込めた言葉を贈った。

(A man who believed in America even when its government didn't necessarily believe in him. That meant something to me. It gave me a powerful sense -- one that I couldn't put into words -- a powerful sense of hope.)

イノウエ議員の、差別と闘いつつ政治的信念を貫徹した人生に、自らを重ね合わせたオバマ大統領の弔辞は素晴らしい。」¹

今まで多くのテーマで日系アメリカ人の研究をしてきたが、今回はこの日系アメリカ人のシンボルともいえるダニエルイノウエ氏の生涯と日系アメリカ人社会さらにはアメリカ合衆国に及ぼした影響力を考察したい。

1 ダニエルイノウエの生い立ち

(1) ダニエル誕生前

彼の存在を知ったのは卒業論文で日系アメリカ人の研究を始めた30年以上前のことである。当時はまだ日本では日系アメリカ人の苦難の歴史があまり知られていなかった。黒人問題が大きくクローズアップされていた中で日系アメリカ人最初の上院議員となった彼の存在は大きく取り上げられていた。ここではまず彼が日系アメリカ人二世になった生い立ちについて考えていきたい。

イノウエの祖父母井上浅吉とモヨ夫妻が四歳の兵太郎とハワイカウアイ島に渡ったのは1899年9月のことだった。彼らの実家は土地で有名な名家であった。しかし

原因不明の火事によって自宅だけでなく隣家も燃え弁償金を払わなければならなくなったのだ。そのため大金を手に入れるため井上家の長男夫婦はハワイに出稼ぎに行ったのである。この年ハワイは合衆国に併合された。

当時のハワイのサトウキビ畑は過酷な労働条件であった。ただサトウキビの収穫をするだけでは、わずかなお金しか稼げず日本に送金すると生活はわずか1ドルか2ドルの残されたお金でやりくりしなければならなかった。そこで兵太郎の両親知恵を絞ってお風呂を経営し、さらに思うようにお金がたまらなかつたので豆腐を作り、当時独身が多かつたサトウキビ畑で朝3時から豆腐を売り困難を克服していった。このように他の移民同様日本の文化を守り日本の生活を大切にしたい浅吉とモヨは兵太郎を日本人学校にも通わせいつか日本に戻った時に困らないようにと教育した。しかし現実にはなかなか日本に帰るだけの十分なお金を稼ぐことができずやがて土地に永住する決意をするようになった。²

兵太郎は8年かかって仕事の合間に小学校を卒業した。日本への借金も半分以上払い終えていたので兵太郎は思い切ってもっと勉強をしたいと両親に打ち明けた。彼の願いは聞き入れられ兵太郎は生まれて初めてカウアイ島を離れ、オアフ島に移った。ここで寄宿舎の舎監となりつましく生活をして25歳の時ミルズ高校を卒業した。このときセオ・H・デービス会社の文書係の職に就いた。この間礼拝にも参加しキリスト教会の会員になっていた平太郎はこの教会であった女の子と結婚することになった。

兵太郎の妻カメは広島県の三田村からマウイ島のプウコリ村に移住した。多くのお金をもうけて日本に戻るつもりだった今永カメの父は生活の苦しさにおぼれていった。夫婦の間に生まれた5人の子供のうち生き残ったのは2人だけで母はカメを生んだ時もサンゴのひだちが悪く二か月も寝込んだにもかかわらず2年後に生まれた子供とともに数日で亡くなった。

妻を亡くしたカメの父はさらに酒におぼれやがて死を悟った父は長男を日本に帰しカメだけを残して他界した。島の人々はカメの身の上に同情し教会で世話をした。そのためカメは日系アメリカ人の中でも特に日本の影響を受けずに成長していた。ダニエル・イノウエが日系人として合衆国で大きな業績を残した一つの起因はこの母の生い立ちにあると考えられる。彼は日系社会のしがらみに縛られる事無く胸を張ってアメリカ人として行動をしていったのはこの母のアメリカ人としての強い信念で育てられたからであろう。結婚式は当然教会であったが兵太郎の両親は初めて教会に足を運んだのでわからない賛美歌に口を閉ざし由緒ある家柄の長男がみなしごと結婚したことへの驚きに耐えいつかいいこともあるだろうと考えたのだそうだ。こうして1924年9月7日ダニエルが生まれた

のである。

(2) 第二次世界大戦前のダニエルについて

死産で生まれた彼が産婆さんの機転で息を吹き返し育ったのはクインエマというホノルルのスラム街だった。生活は常に厳しく白人世界と明らかに違っていった。しかしダニエルはその事に影響される事無く元気に生き生きと成長した。しかし、日系社会で育ったダニエルは日本語ばかり話なかなか英語は覚えなかった。そこで彼の両親は彼が幼稚園に入ると家庭でも一切英語を話さなくなった。

彼の母はダニエルに言ったそうだ。「昔からある習慣からだって、とつても実用的だと思われるものなら、取り入れるね。新しい習慣からも、結構役に立つものは取り入れるわ。そうしない人はとんまなの。」³このように彼は日本の文化から隔離される事無く東洋と欧米が打ち合うこともなく二つがまじりあった生活をしたのである。これはハワイの日本人社会全体の特色でもあった。

日本独特の長男としての責任を背負いながら彼はアメリカ人としての考えを曲げることなく成長していった。近所の老人が日本の天皇を崇拝しその考えを押し付けようとしたときダニエルは真っ向から反対した。貧しい生活を余儀なくされた多くの日本人家族が集まる地区でダニエルは白人に負けないように強くたくましくそして勤勉に成長した。どの日系人の家庭同様に彼も授業後日本人学校に通っていたが、そこで教師に自分達は日本人なのだから日本人らしくふるまえと言われ彼は強く反発した。時は第二次世界大戦まじかな時期だった。ハワイの高校は誰にも公平な公立高校にもかかわらずほとんどが日系人という人種差別があったという。ハワイでは本土程の差別はなかったという資料が多かっただけにダニエルの自伝に書かれたこの差別はかなり衝撃的であった。

高校でも苦難は続いた。なんとか白人の生活に近づこうとする多くの日系人の若者を非難し自分が正しいと思う事を貫く強い信念のため多くの人間と対立した。しかしこの対立の中で彼は勉強では誰にも負けたくないという野心で医者になる決意をかためていく。さらに親友とレスリングをして左腕を複雑骨折し、ほとんど手を動かすことができなくなったときお金がないこの日系人の少年に手術をしてその代金を彼へのプレゼントだといってくれたクレグ先生と出会い彼の医師になるという思いがさらに強くなった。しかし彼の夢を奪うことになる真珠湾攻撃の日が間もなくやってきた。ハワイには人口の40%を日系人で占めていたがこのいつも静かな何事にもまじめで忠実な日系人は、この日を境に敵国外国人となり本土の日系人は強制収容所に入れられみじめな苦しい生活を余儀なくされた。ハワイの日系人は先に述べたように40%を占めていたので強制収容は不可能だったが、特に日本との関係が深い日系人は逮捕され本土に送られたのである。ダニエルは、自分の平和を壊した日本人を強く非難するとともに、

その兵士の中に自分のいところにいるかもしれないと思った時さらなる絶望が襲ったという。この葛藤は日系移民の歴史を研究し始めた時から多くの資料の中に残されていた。

2 第二次世界大戦とダニエルについて

(1) 真珠湾攻撃後の日系人社会

先にも述べたようにハワイの日系人は、本土の日系人と違い強制収容される事はなかった。さらにハワイの人々は冷静に日系人と戦争を仕掛けた日本人は違う事を認識し扱ってくれた。しかしダニエルの心の中には後ろめたい気持ちがいっぱいになっていった。日系人達はラジオや刀など危険と思われるものはことごとく検閲され没収された。それでもアメリカ人であることを認めてもらうために、彼らはどんな差別的な仕事でも喜んで行った。なんとか白人たちと同じように扱ってもらおうとした。このような行動は、今まで本土の日系人ばかり研究してきた筆者には珍しく感じられた。本土の日系人達は何の行動も認められなかっただけでなくあつという間に敵格外国人として数週間の猶予もないままに家を立ち退き砂漠へと追いやられたのである。ダニエルは、けが人の手当ての仕事しながら学業を続けていった。いずれ医学を目指すため彼はどんな差別にも負けず努力していった。

翌年彼は、「スカラスティック」誌のエッセイコンテストに作品を出すように言われたダニエルは、自分の気持ちを思いっきり表現した。

12月7日の朝、オアフ在住の2世であることはどんな気がしたか。日本人の両親のもとに生まれながら、日本人飛行士のむごい猛攻撃で死んだ男女の散乱した焼死体を処理するとはどういうことかだったか。それを一つ残らず書いたということである。⁴このエッセイは準州当局の第一位になってさらに全国コンテストで選外佳作になったという。彼の作品が準州当局で一位になったという事がいかに本土とハワイで日系人を見る目が違っていったか理解できる出来事だと考える。そしてやがて彼が初の日系人の下院議員さらに上院議員に選ばれた要因であると考えられる。

(2) 442部隊入隊へ

1942年ダニエルはハワイ大学の医学部進学課程に受講登録した。しかし彼は当局からの入隊を強く希望していた。応急手当所で仕事を続けていたがもはやハワイは戦場の中心ではなくハワイにいても母国アメリカを守れないと考えていた。しかし本土で敵格外国人として多くの若者が収容所に入れられている現状の中で日系人であるダニエルが入隊することは難しかった。

アメリカ軍の強化のため事態が変わったのは1943年のことだった。何の制度も強制もなしに、陸軍省は4000人

の二世義勇兵を受け入れると発表した。この中で歴史上名を残す 442 部隊はこのような背景で編成された。

ダニエルとは違い、本土の日系二世たちは、収容所での悲惨な扱いからなんとか家族を救いたいと思う気持ちから志願したのである。しがんするにあたって彼らは国への忠誠を誓う宣誓書を求められ、それに反発して収容所に残ったものも多かった。彼らは戦後多くの人たちから非難され厳しい人生を送ることになった。さてここで 442 部隊について少し説明したい。

この計画を同年 2 月 1 日に個人としても承認したフランクリン・H・ローズベルト大統領は、それに関して次のように発言した。「忠誠な日系アメリカ市民の戦闘部隊を作ってはどうか、という陸軍の提案は、私が全面的に承認した。祖先のことはどうであろうと、アメリカの忠誠な市民に、市民としての責任をはたす民主的な権利が与えられないようなことがあってはならない。アメリカニズムとは、心情の問題である。またアメリカニズムとは、今もかつて、決して、人種や祖先の問題ではないのだ。」

この発言はいかに民主主義を守る合衆国の姿を現しているようであるが、白人とは一緒に軍隊に入れることはできないという世間の意見と、それでもアメリカ人ならその忠誠心を何らかな形であらわせという意見とさらになんとか自分達の忠誠心を表したいという必死の思いをうまく利用した作戦だったのである。この作戦によって多くの日系人が軍隊に入りヨーロッパに渡っていった。この戦争の中でダニエルは目覚ましい活躍をする。

彼は、1945 年 4 月 21 日、イタリアのサン・テレンツォ近郊における作戦中の際立って英雄的な行動によって、その名を残すことになった。重要な交差点を守るべく防御を固めた稜線を攻撃している間、少尉であるダニエルは自動火器と小銃からの射撃をかくぐって巧みに小隊を指揮して、素早い包囲攻撃によって大砲と迫撃砲の陣地を占領し、部下たちを敵陣の 40 ヤードまで導いたという。岩陰に潜む敵は 3 丁の機関銃からの砲火で友軍の前進を停止させた。ダニエルは自分の安全を考えるとなく足場の悪い斜面を機関銃から 5 ヤード以内の位置まで這い上がり手榴弾を 2 個投げ込み銃座を破壊した。敵が反撃する前に第二の機関銃座を破壊した。狙撃で負傷しても手榴弾の炸裂で右手を失うほど至近距離で敵と戦った。激しい痛みにも関わらず部下が敵の防衛体制にはいるまで指揮を続けたという。敵は 25 名が死に 8 名が捕虜となった。彼の勇敢な行動によって要塞を占領し作戦は成功した。

この内容はダニエルの死後のインターネットの情報に載っている。⁴当時の詳しい状況はダニエルの自叙伝に書かれている。搬送される様子その後の治療の様子、それは医学を目指した彼だからこその記述であった。彼の勇敢な行動により名誉勲章を受けている。さらに中尉に昇進し殊

勲十字賞ももらった。日系移民の歴史を研究する中で 442 部隊の勇敢な行動は多く取り上げられ彼らの活躍により厳しい差別が少しではあるが緩和されたと記録されていた。今回ダニエルの行動を知るとき改めてこの勇敢な日系人の功績の多くを彼が成しとげたのであろうと考えている。まさに日系人の誇りの象徴である。

(2) 戦後の生活と政治家としての出発

このように彼は名誉を受けたが失ったものも多かった。外科医になりたかった彼の夢は右腕とともに消えていった。しかし病院に入院している間に彼は多くの負傷した仲間に出会った。自分の不幸な身の上をアメリカや日本のせいにして仲間に叱咤激励し看護師の求めに応えて片手ながら医療の手伝いをするようになった。こうして多くの経験をし、多くの心の傷ついた人々を見ていくうちに彼はなんでも自分でできるようになると努力していった。いつまでも沈んではいけないという思いで新たな人生を見つける決意をした。

ハワイ大学に戻った彼は 1950 年に政治学の学士号を取り卒業した。その後ジョージ・ワシントン大学の法科大学院に進学し 1953 年に J・D を授与された。1954 年退役軍人の Elton Sakamoto, Sakae Takahashi らと Central Pacific Bank を設立した。彼が下院議員になる前知り合いが準州選出の連邦下院議員になりハワイがうまく州になるように尽力した、442 部隊の復員軍人が準州議会や市議会にどんどん選ばれるようになった。1950 年にハワイ大学を卒業するまでに彼はハワイ大学の先生だったマーガレットと結婚しアメリカ本土に渡った。大学の授業の合間に民主党の事務所で仕事を始めたダニエルは先に述べた銀行を設立した後 1953 年 8 月司法試験に合格した。しかしその頃彼は政治に興味をもっていたので弁護士事務所の看板を出すことなく政治家になっていった。1957 年先の友人ジョーンバーンズのすすめにより彼は選挙に出ることを決意し 1959 年民主党からハワイ州選出の連邦下院議員になりアメリカ初の日系議員となった。その後 1963 年には先輩議員の引退で後継者となるべく上院議員になりさらに 442 部隊の団員だったスパーク・マツナガも下院議員になった。⁶

3 政治家としての業績

彼は民主党の上院銀として上院歳出委員会の国防章委員会で上級委員を務めたほか、カリフォルニア州ロサンゼルス日本人街リトルトウキョウにある全米日系人博物館の理事も務めた。この博物館はダニエルの二番目の妻が館長を務めていたこともある。この博物館には強制収容所

での資料や当時の収容所の再現、マイクロフィルムによる当時の新聞や出版物の保存がされている。強制収容所での貴重な資料である。さらに2006年6月21日に陸軍殊勲十字章、青銅星章の授賞理由が見直され、軍人に贈られる最高位の勲章である名誉勲章を受章したほか2007年11月、フランス政府からレジオンドヌール勲章を授与された。2008年アメリカ合衆国大統領選挙において、ヒラリークリントン上院銀を支持した。2010年には苦戦の末再選された。⁵

彼の何よりの功績は、1988年の市民的自由法の成立への働きかけである。戦後収容所を出て故郷に戻った日系人は、自分達には何か非があったから収容されたんだと自分を責めた。収容所で体験をしたことを語ることなく静かに生きることを強く願った。しかし時代は変わり、日系三世が成長し、自分達のアイデンティティーを探るようになった時じぶんたちの祖父祖母たちがひどい扱いを受けたことに気付いた、そこでこの扱いを正すべく運動を進めた。この運動にダニエルが力を貸したのである。はじめは口の重かった一世たちは補償問題でヒヤリングを重ねるうちに自分達の体験を語るようになった。ここで集められた資料をもとに多くの文学作品が生まれていった。1988年市民的自由法が成立し自分達の正義を正されたことで日系人達は金銭だけでなく名誉も得たのである。²

1980年代に、日米間の貿易摩擦が政治問題化した際には、リチャード・ゲッパーなどと共に、対日批判の急先鋒として立ちまわったが、晩年は日本に対して融和的に変わったという。2007年に中国や韓国が「慰安婦強制連行説」を主張して合衆国がそれに伴う121号が下院で決議されたとき大日本帝国軍人によって慰安婦に暴行抑圧をしたことは疑いの余地はなく、日本政府の6人の首相と2つの衆議院決議が1994年以来問題を認め謝罪を行ってきたことを尊重すべきだとして、対日外交の継続性の観点から新たに謝罪を求めることに反対した。

2012年12月ワシントンD・C郊外のメリーランド州ベセスダにあるジョージ・ワシントン大学病院に入院し、酸素吸入の処置を受けていたが17日17時過ぎ、呼吸器合併症で死去。88歳だった。死亡前最後の言葉として次のように語ったという。

「ハワイと国家のために力の限り誠実に勤めた。まあまあ。できたと思う。」最後の言葉は「アロハ」だったと書かれている。⁴

終わりに

ダニエル・イノウエの伝記の付録に彼の議会での発言、442部隊に入った理由のスピーチなどがある。彼は日系人の名誉の為に志願したという。自分達の名誉が442部隊の活躍で認められやがて差別にあふれた日系人社会に少し

ずつではあるが光が見えていたのである。そして彼は、この戦いで自分達のような日系人が政治に参加する機会を勝ち取ったと感じていた。

筆者は長い間本土の日系人の歴史を中心に研究をしてきた。ハワイについては写真花嫁としてサトウキビ畑にきた女性の姿を描いた作品にも出会った。⁵しかしダニエル・イノウエのようなハワイで生きた日系二世の男性の姿を研究した事はなかった。日系人が上院議員になることがどれだけ大変かは理解してきたつもりであったがそこには自分はアメリカ人なのだという強い意志、日系人としての名誉のために動かされてきたという認識がなく、あらためてどれだけ日系人が名誉の為に涙や地を流し生きていたかを認識した。

彼の棺は、アメリカ合衆国議会議事堂中央にある大広間に安置され追悼式が開かれた。大広間に安置されたのは、リンカーン、ジョン・F・ケネディなどの一部の大統領とごくわずかな議員だけであるという。かれが市民的自由法成立のときに日系人の名誉のために戦い名誉を回復し、アメリカ社会が日系人の存在を認め、ダニエル・イノウエの命がけの努力が認められた証拠であろう。

日系アメリカ人の文学を長年研究してきたが、近年日系アメリカ文学が今後存在するか疑問に感じてきた。日系アメリカ人としてのくくりを解かれ文学作品が発表されていくことが自然である時代がやってきたということであろう。今後、ダニエルの業績と日系人社会への影響をさらに研究していきたい。

参考文献

1. <http://news-log.jp/archives/5950>
2. ダニエル・イノウエ、森田幸男訳；上院議員ダニエル・イノウエ自伝、p 20, 47, 113, 231-232, 318, 118-119、東京、彩流社。
3. 前山陸；ハワイの辛抱人、お茶の水書房、東京、1986。
4. <http://www.foxnews.com/politics/election/candidate/Daniel-ken-inoue/>
5. ジョン・オカダ、中山容訳；ノーノーボーイ、東京、1981。
6. 猿谷要；アメリカ史重要人物 101、p p 206-207、新書館、東京、1997。

(受理 平成25年3月19日)